



Title	Topic Hierarchies in Middle English with Special Reference to Impersonal and Ditransitive Construction
Author(s)	吉川, 史子
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/42256">https://hdl.handle.net/11094/42256</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	吉 川 史 子
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 1 5 7 1 7 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 12 年 9 月 27 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	Topic Hierarchies in Middle English with Special Reference to Impersonal and Ditransitive Construction (中期英語と話題の階層—二重目的語構文と非人称構文に関する考察)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 今 井 光 規  (副査) 教 授 渡 部 眞 一 郎      助 教 授 渡 辺 秀 樹

### 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は名詞の与格形と主格・対格形との融合に影響を受けたと考えられる中期英語の二つの構文、二重目的語構文と非人称構文を取り上げ、それらの構文の通時的変遷を説明するものである。Givón (1995:92) によって機能的類型論的調査研究の結果としてまとめられた、discourse participation、agentivity、definiteness、anaphoricity等の別による話題の階層(The generic topic hierarchies)を用いることによって、現代英語で標準的な二重目的語の語順の定着、また非人称構文の消失の過程を説明する:

The generic topic hierarchies (Givón, 1995, p.92)

- a. Discourse participation: speaker > hearer > 3rd-person
- b. Animacy: human > animate > inanimate
- c. Agentivity: agent > dative > patient
- d. Gender: male > female
- e. Age: adult > child
- f. Size: large > small
- g. Possession: possessor > possessed
- h. Definiteness: definite > indefinite
- i. Anaphoricity: pronoun > full-NP

本論では、まず第1章で研究の目的と方法論について述べた後、第2章で上記の話題の階層に関係する機能言語学の術語を説明する。第3章では本研究で取り扱う二つの事象(二重目的語構文における語順の定着と論理的主語を持たない非人称構文の消失)が与格、対格語尾の水平化と深い関わりを持つことを示す。その二つの構文の特性を考えるとともに、屈折語尾と語順、迂言の格表示の関連性について論じた先行研究を概説する。第4章では中英語の二重目的語構文を分析する。Quirk et al. (1985:1208-1210) は、現代の英語における ditransitive complementation に関して indirect and direct object と object and prepositional object の組み合わせを挙げているが、F. Th. Visser (1963-73:606-648) は古英語以来の動詞の二つの目的語について以下の8つの範疇に分類している:

- (a) Indirect Object + Causative Object (in the genitive)
- (b) Direct Object + Causative Object (in the genitive)

- (c) Direct Object + Ablative Object
- (d) Indirect Object + Direct Object
- (e) Direct Object + Direct Object
- (f) Indirect Object + Prepositional Object
- (g) Direct Object + Prepositional Object
- (h) Prepositional Object + Prepositional Object

本研究では与格目的語と対格目的語に限って調査し、属格、奪格については扱わない。まず、初めに与格、対格の二つの目的語の組み合わせ全てについて Chaucer、Julian of Norwich（共に14世紀）がどのように用いているかを観察し、中期英語においても二重目的語の語順が現代英語同様に「情報の流れ」に沿ったものであることを確認した。V+DO+IO の語順が用いられた場合、V+O+prpO という形で前置詞 to または unto を用いて与格をマークしなければならないほど与格名詞は強調されていないことが観察された。すなわち、V+O+prpO という前置詞付きの形とは異なり、前置されている対格代名詞の it ばかりでなく、続く与格人称代名詞も共に情報量が少ない、すなわち、話題性（topicality）が高いと考えられる。さらに、V+DO+IO の語順において後置される間接目的語の人称代名詞に着目すると、会話が実際に行われている場に巻き込まれやすい一人称、二人称が圧倒的に多く観察された。この間接目的語の人称の偏りに関しても人称間の話題の階層と矛盾しない。

次に、語順 V+DO+IO を *The Helsinki Corpus of English Texts* を用いて中期英語後期から初期近代英語まで調査した。特に「give+it+人称代名詞」の形でイギリス英語に見られるこの語順は「give+it+to+人称代名詞」から前置詞 to を省略したものだとするいくつかの英語学習者向け辞書や方言学的研究の説明に疑問を持ったからである。検索の結果、中期英語以降のファイルにも常にこの語順が見つかったことから、この語順が最近になってイギリス英語だけに特異に発達し、復活したものではないと考えられる。it は非常に情報量の少ない topicality の高い代名詞であるので、この語順は旧情報から新情報へという「談話の流れ」に非常によく沿うものである。また、accusative、dative の屈折が水平化した現代英語においてもこの「ditransitive verb+it+人称代名詞」の構成であればその区別が容易である。この二点が V+DO+IO の語順が現在においても消滅していない理由であると考えられる。

第5章では非人称構文について考察する。古期英語、中期英語には、天候や時間などを表す it を伴った非人称構文の他に、現代英語にはみられないような、論理的主語を持たず、三人称単数で用いられた非人称動詞による構文が存在した：

(1) And therefore me thynketh that pacience is good.

Geoffrey Chaucer, 'The Tale of Melibee,'

*The Canterbury Tales*, l.1539.

従来、この非人称動詞と人称動詞の競合については多くの研究がなされてきたが、その一つ、*Helsinki Corpus* を用いて非人称動詞の使用頻度の通時的な変遷を調査した Palander-Collin (1993) によれば、13世紀、14世紀初めに think は人称・非人称両方の構文で用いられていたが、1350年以降その非人称用法は seem にとって代われ、think は人称用法のみ担うようになっていく。

本研究では、まず、Palander-Collin (1993) に従って非人称動詞 think の時代別出現頻度を調査し、さらにそれから非人称動詞に先行する与格代名詞ごとに出現頻度を調査した。その結果、中期英語後期のファイル hcm 4 (1420-1500) においては一人称単数が非常に増加していることがわかった。この結果は非人称構文が現代英語では決まり文句的に methinks、methought となっていて残っていることに一致し、代名詞が実名詞と比べて主題性が高いことと一人称が人称間の話題性が一番高いことの両方に矛盾しない。非人称、人称の競合についても、文頭の位置へ主題性 (topicality) のより高い動作主 (agent) として主格が定着したことは主題の階層に矛盾しない。

次に、van der Gaaf (1904) で、“this use of the peculiarities of Chaucer’s language; it does not appear to occur anywhere else.” と、その非人称構文が Chaucer に固有のものであるように述べている動詞、remembren をとりあげる。van der Gaaf (1904) は、remembren は14世紀には再帰構文で用いられていたにもかかわらず、Chaucer がこの動詞を非人称構文でも用いたことを指摘した。

ここではまず、電子可読テキスト版 *The Riverside Chaucer* を用いて Chaucer の remembren を用いた文を全て

収集し、それを分類することによって van der Gaaf (1904) の観察結果を検証した。結果、確かに Chaucer は remembren を非人称構文で多用しているが、実は Chaucer も再帰構文で用いているほうが多いことがわかった。

次に Kemmer (1994) の自動詞性、他動詞性に基いて当時の再帰構文と非人称構文が共に完全な他動詞と比較して他動性の低い構文であり、近い voice にあったと見ることによって、当時代 remembren の一般的用法ではなかった非人称用法が許されると Chaucer が判断した背景を説明した。すなわち、そもそも古英語の非人称動詞群が表していた性質（判断や心の状態）は再帰構文の提示する意味構造にも非人称構文が提示する意味構造にも、どちらにもうまくあてはまるため、主格名詞を文頭に置く語順が確定しつつあった中期英語の大きな動き、言い換えれば、van der Gaaf (1904) が指摘した非人称から人称への流れの中にあっても、古英語の非人称動詞群が表していた性質（判断や心の状態）が持つ自動詞性と他動詞性の度合いのあいまいさゆえに、時に歴史的定向変化に逆らった方向に非人称用法を使ってしまう著述家も現れたと考える。Hopper and Traugott (1993:36) によれば、ある文法規則に関する通時的変化は急激に進むとは限らず、文法の再解釈による一連の変化の過程において長く中間段階が続くことは、そう珍しいことではないという。14世紀は非人称構文と再帰構文の共存するまさにその中間段階の時代であり、Chaucer の非人称構文はその過渡期の時代であったからこそ可能であった表現形態であったが、その大きな変化の流れに逆らったため定着しなかったと考察した。

以上のように、通時的に見て、ある語順への固定、ある構文の消失と見えるものをより綿密に調査し、変化の方向、または変化の進行が遅れるものに、話題の階層を用いて説明を与えた。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、中英語期における英語の統語上の変遷ならびに構文の競合状況を調査し、そのような変遷や状況がどのように起こったかを機能文法の理論を使って説明しようとしたものである。フィロロジカルな英語史研究、機能文法理論の応用、コーパス言語学的方法の活用という3つの要素を組み合わせた点が、この論文の特色である。

第一に焦点を当てているのは、give のように2つの目的語をとる動詞に係る間接目的語と直接目的語の語順の問題である。今日の英語では、1)「間接目的語—直接目的語」、あるいは、2)「直接目的語—前置詞付きの名詞」という語順が用いられるが、時には、3)「直接目的語—間接目的語」という語順もイギリス英語に観察される。この最後のものについて、本論文は、2番目のものの前置詞が省略されて生じた語順とする説を退け、「直接目的語—間接目的語」の語順が、英語史のすべての時代に存在したことを実証し、さらに、その語順が生き延びた理由を「話題の階層性」と「情報の流れ」という機能文法の観点から説明している。本論文の最も大きな功績はこれらの点にある。

本論文が焦点を当てるもう一つの現象は、14世紀の英語、特にチョーサーの英語における非人称構文と人称構文の競合である。具体的には、remembren、think などの動詞の使用例を広範に調査し、収集した正確なデータに基づいて先行研究の誤りを正し、語順の研究の場合と同様、機能文法の理論を活用して、この時期における非人称構文から人称構文への通時的変化の複雑な実体の概略を解明している。

本論文は、各種の既存のコーパスだけでなく、独自に編纂した14世紀宗教散文作家の作品のコーパスからも用例を収集し、それらを高度なコーパス言語学的技術を駆使して分析している。細部の説明や表現にはやや不十分な箇所も見受けられるが、議論の展開は全体として明晰である。

以上により、本論文は博士（言語文化学）論文として十分に価値あるものと判断する。